

東 北 大 学

東 北 大 学

I. 実 施 報 告

(1) 実施責任者報告

東北大学教育学部附属大学教育開放センター長 細谷 純

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

昭和51年度から始まった「放送による東北大学開放講座」は、東北大学の教育学部に附属する大学教育開放センターが、大学教育の社会的開放という基本的使命にもとづき、学内各部署の協力を得て、企画・実施するという形でおこなわれている。ただし、この講座の企画にあたっては、本センターの「運営委員会」（教育学部をのぞく9学部と教養部からそれぞれ代表として委員が1名ずつでるほか、本センターの専任教官、兼任教官、教育学部事務長、庶務、教務、会計掛長の教育学部スタッフで構成）でテーマ、担当講師等を慎重に審議し、全学の意向が十二分に反映されるように配慮されている。また、講座の運営、実施の主力となるのが「大学教育開放センター会議」（本センターの専任教官、兼任教官、教育学部事務長、庶務、教務、会計掛長で構成）で、講座の細目の審議、決定、そして実施にあたる。加えて、本「放送による東北大学開放講座」のために、教育学部に以下の委員会が特別に設けられ、円滑な講座実施がはかられている。1）講座実施委員会（本センターの専任教官、兼任教官、それに講座出演全講師で構成） 2）総務委員会（企画・運営・調査・広報・渉外・庶務担当） 3）テキスト委員会（印刷・校正等担当） 4）スクーリング委員会 5）理解度調査委員会 6）放送講座調査研究委員会

また、番組制作にあたる放送局との関係については、講座を企画・編成するにあたって、「企画段階から制作者の参加」という放送局スタッフの要望を十分に考慮にいれ、テーマを設定する段階から、大学と放送局とのあいだで意見を交換しあい、議論を深めながら、企画・編成をすすめた。

さらに、本開放講座を実施するにあたっては、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会から「後援」をうけ、広報活動などで便宜をはかってもらう一方、仙台市博物館の協力も受け（昭和61年度から）、館内の一劃で「再視聴センター」を開設する便宜をはかってもらっている。

加えて、県内各市町村からは、適宜、市（町村）政だより等での講座開設報知、そしてポスターの掲示等で協力をうけている。

2. テーマの選定とそのねらいについて

テレビ講座「中世のみちのくの城館」

中世の城館を通して地域の歴史的環境を考えることをテーマとした。

今日、地域開発の波が押し寄せるなかで、地域の自然環境とともに、歴史的環境も破壊の危

機に直面している。本講座では、具体的な「場」であるバラエティに富んだ中世の城館を通して、古文書だけではわからない地域の歴史的環境の形成を明らかにし、あわせてその保存の問題についても考えていくことをねらいとした。

ラジオ講座「日本古典文芸にみる女性像」

日本古典文芸のなかにみられる女性像をさぐることをテーマとした。

日本古典文芸の作品を通して、そのなかにみられる女性たちの真の姿を浮き彫りにし、女の生き方について考えることをねらいとした。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

「放送による東北大学開放講座」は、放送番組（講義）と印刷教材（テキスト）とスクーリングを3本の柱として開設されている。したがって、本講座を編成するにあたっては、それぞれの講座の基本構想をしっかりと練り各講師の共通理解を深めることはいうまでもないが、それぞれの柱（放送番組と印刷教材とスクーリング）のもつ特性を十分に考慮し、そのうえにたつて、講座の企画・構成がすすめられた。そのさい、とくに留意されたのは、以下の点である。

1)「講義目的の明確化」 2)「講義内容の一貫性」 3)「一定の教育水準」 4)開放講座としての性格を強くうちだすために、テーマを設定するにあたっては、一般市民の多様な関心を配慮する。 5)これまで本センターが実施してきた「放送講座」が掲げてきた主題のより一層の展開といった点も考慮する。

また、印刷教材を作成するにあたっては、以下の点をとくに考慮した。1) 平明な叙述と独立した読みものとしての一貫性をもたせること。2) 放送内容との相即性は必要であるが、完全な一致は求めない。3) テレビ講座の場合、放送に用いた図表等はできるだけテキストに収録する。4) ラジオ講座の場合、電波メディアにのらない図や表、絵や写真などはできるだけテキストに収録して、受講生の学習に資するように配慮する。

本講座は、放送メディアを活用した講座であるが、受講生がこのような講座で学習しようとすると、どうしても講師や仲間同士のコミュニケーションの機会が乏しくならざるをえないということがある。したがって、本講座ではこのような特殊事情を考慮して、受講生の学習効果の向上に資するためにスクーリングを実施している。スクーリングは、受講生の数が多いため、あらかじめ本センター宛、郵送によって質問をよせてもらい、それに対する回答を含めた講師の補足説明、さらに会場での質疑応答といった形でおこなわれ、例年、受講生から好評を博している。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

本センターは、この放送講座を開設するにあたり、受講生の講座受講によって生ずる教授・学習効果を検討するため、例年、質問紙形式の理解度調査をおこなっているが、本年度もこれを実施した。ただし、この結果については、現在、調査票回収、集計処理作業中なので、その詳細はいずれ日を改めてということにしたい。

全般的に、本年度の受講生は、きわめて熱心で、テレビ講座、ラジオ講座の各講師の先生方も異口同音にこの点を述べられていた。また、スクーリング会場で、講師の先生方の懇切丁寧

な受け応えもあり、時間が不足する場面もかなりあった。

5. 印刷機材の作成過程について

「放送による東北大学開放講座」は単年度事業であり、この放送講座を担当する講師の先生方にとって、番組出演もさることながら、テキストの執筆、校正が、時間的制約のなかで、たいへん厄介な仕事であることはいふをまたない。また、原稿割り付け、校正、装丁、印刷、製本などの全過程に関わる「テキスト委員会」の作業も骨の折れる仕事であり、本年度も夏休み返上でつづけられた。

6. 学習指導の実施状況について

本講座では、前述したように、受講生の学習効果の向上に資するためにスクーリングを実施しているが、その概要は以下のとおりである。

◇方法 1) 郵送による質問への回答を含めた講師の補足説明

2) 会場での質疑応答

◇日時・場所

回	月 日 (曜)	時 間	会 場
開講式 第1回	9月28日 (土)	ラジオ・テレビ 14:00~16:00	東北大学法学部
第2回	11月10日 (日)	ラジオ 10:30~12:30 テレビ 13:30~15:30	東北大学教育学部 〃
第3回	12月1日 (日)	ラジオ 10:30~12:30 テレビ 13:30~15:30	東北大学教育学部 〃
第4回	12月15日 (日)	ラジオ 10:00~12:00 テレビ 10:00~12:30	東北大学教育学部 〃 文学部
閉講式	12月15日 (日)	ラジオ・テレビ 12:00~12:30	東北大学教育学部

◇出席者数

講 座	受講生総数	9月28日	11月10日	12月1日	12月15日
ラジオ	226 (100)	104 (46.0)	62 (27.4)	72 (31.9)	63 (27.9)
テレビ	268 (100)	115 (42.9)	101 (37.7)	90 (33.6)	105 (39.2)
計	494 (100)	219 (44.7)	163 (33.0)	162 (32.8)	168 (34.0)

〈参考〉再視聴センター利用状況

講 座	実施回数	延べ人数	1回平均	仙台市博物館延べ人数
ラ ジ オ	9回	3人	0.3人	25人
テ レ ビ	10回	4人	0.4人	115人

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

東北大学の教育学部に附属施設として「大学教育開放センター」が設置されたのは昭和48年のことである。大学教育の社会的開放にかんする研究と事業活動をおこなうことがその設立の趣旨であり、この種の施設が、わが国の国立大学におかれたのは、これがはじめてであった。本センターは、大学教育開放活動が大学の重要な働きの1つでなければならないという認識にたって、この面で世界の先進諸国に遅れをとっているわが国の現状を多方面から検討し、大学教育を一般社会に開放していくにあたってのさまざまな問題を、みずから開放事業を企画・実施するという実地の経験を通して研究・解明していくことを任務として発足したのである。したがってセンターの主要な活動は、研究活動と事業活動の2つに大別できるが、昭和51年度からはじまった「放送による東北大学開放講座」は、本センターの事業活動のなかに「特別事業」として明確に位置づけられ、すでに10年以上を経過して、本センターの看板事業として地域社会にすっかり定着している。本センターは、この「特別事業」のほかに、「主催事業」「共催事業」「受託事業」など数多くの大学開放講座もおこなっているが、まだまだ地域社会全体のなかで量的にみれば大海に投じられた一石にも等しいものである。そのなかで本「放送による東北大学開放講座」は、放送メディアの利用ということから、毎回放送時には数万人の視聴者を数える（視聴率調査）ということから、本センターとしては、大学教育開放の主旨をもっとも活かせる講座として大いに注目し、大いに期待し、またよりよいあり方を目ざして毎年度、さまざまな工夫をこらし、努力を重ねてきた。これまでの成果がそれであるが、大学と地域社会とを結びつけるパイプ役として、その真価が問われるのはまさにこれからであり、これまで以上に内容の充実した放送講座を企画、実施していくにはどうしたらよいか、それが本センターの課題であることはいうまでもない。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

大学教育開放センターが、これまで実施してきた放送講座のなかで、昭和52年度開設の「地域の科学」は、本学の教養部、それに在仙の私立女子短期大学の社会学の授業の一部として、昭和54年度開設の「地震災害と市民生活」は、本学の教養部の正規の授業の一環として、また同年開設の「がん制圧をめざして」と昭和56年度開設の「生命をひもとく」は、本学に併設されている医療短期大学の授業の一環として、さらに、昭和61年度開設の「人と国家と社会と～宮城経済近代化のダイナミックス～」は宮城教育大学の授業に利用されたが（いずれもテレビ講座）、本年度開設の放送講座については「大学の授業への活用」の計画はとくにない。ただし放送講座の「大学の授業への活用」は、掲げたテーマの性格にもよろうが、その可能性は大いに検討されてしかるべきと考えている。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

平成3年度に実施した「放送による東北大学開放講座」をふりかえって、今回の講座開設にあたって、浮かびあがった問題点、特記事項のいくつかを摘記してみたい。

- 1) 本年度は、テレビ講座が、昨年度の「地球環境の危機」のあとをうけて、歴史的環境を考える「中世のみちのくの城館」という講座を、またラジオ講座が、日本古典文芸シリーズと

して「日本古典文芸にみる女性像」という講座を開設した。受講生数は、「中世みちのくの城館」が268名、「日本古典文芸にみる女性像」が226名と、両者とも定員を大幅に上まわった。本年度の特徴は、テレビ講座では男性が、またラジオ講座では女性が7割をこえていたことである。とくに、女性の社会進出が顕著な今日、「日本古典文芸にみる女性像」が多く女性の関心をひきつけたと考えられる。また、スクーリングにおいても実に活発に質問が出され、関心の高さがうかがわれた。そして菊田主任講師らの丁寧な対応もあって、受講生から好評を博した。

- 2) テレビ講座では、いろいろな角度から身の回りの歴史的環境を考えようという意図から、学外も含め総勢13名の講師によって編成された。担当講師が多い場合、内容の一貫性を保つことが難しくなるが、入間田主任講師のご尽力により、一定の教育水準と講座全体のまとまりを持つことが出来た。また、スクーリングにさいしては、会場近くに位置する城館（仙台城）と板碑の実際に触れながら、質疑応答を行うという臨地のスタイルが試みられ、好評を博した。
- 3) 本センターでは、放送講座の特性を考慮してスクーリングを重視しているが、テレビ、ラジオ両講座とも時間が不足する場面が見られ、今後スクーリングのもち方を工夫する必要があると思われる。
- 4) 例年のことではあるが、出演講師の側からすれば、準備期間の短いことが問題である。担当講師は、講座全体をふまえて、数ヶ月のうちに、講義、番組の構想を練り、企画会議への出席、放送局スタッフとの打ち合わせに従事する。このような超過密スケジュールのなかで、取材活動、テキスト原稿執筆、スタジオ録音、録画をこなしていくということになるが、これは相当過重な日程であった。とりわけ本年度は、テーマの性格上現地での取材・収録などが多かったため、講師らとの連絡や日程調整に時間がかかり、主任講師の負担がさらに大きくなってしまった。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 中世みちのくの城館

主任講師：教養部教授 入間田 宣夫

「中世城館という身近な素材を通じて、地域の歴史環境を考える」。これが今回のテレビ講座の主目的であった。昨年の講座が、地球環境というグローバルな問題について、自然科学の側面からアプローチしたのにたいして、今年は地域の歴史環境という生活に即した身近な問題について、歴史学・城郭史学・考古学などの側面から接近することになった。

京都・鎌倉・江戸などの中央に偏った歴史研究のありかたを反省して、列島のそれぞれの地域における歴史研究を、個別・具体的に推進するという課題が意識されるようになったのは、つい最近のことに属する。そして、古文書・古記録などの文献に頼る書斎中心の歴史学のありかたを反省して、フィールドに出向いて、地域の景観、地下の遺構・遺物などに触れるなかから、人びとの生活の歴史を復元するという課題が意識されるようになったのも、これまた最近

のことである。

学問の側の内部事情があったばかりではない。地域の住民の側にも、歴史にたいする関心の高まりが見られるようになった。歴史学の既成の成果を受容するに止まらず、自分たちの足で歩いて、自分たちの感覚で確かめて、地域の歴史を組み立てるという意欲が生じるようになった。大規模な開発が行われ、山川・原野の姿が変えられていく最近の情勢は、地域の歴史的環境にたいする住民の意識を敏感なものにさせて、景観や遺跡の保存にたいする議論を巻き起こすことになった。

今回の講座は、既成の学問のありかたにたいする反省、そして地域住民の側における歴史意識の高まりという内外の状況に即応して、新しい学問のスタイルを模索する絶好の機会を提供してくれた。13人の講師の全員が、未知の分野に挑戦するという緊張感をもって、準備の作業にとりくむことになった。既往の成果に安住することはできない。新たな問題意識、新たな素材の開発に、全員がとりくむことになった。

それだけに、撮影スタッフの苦労は大きい。草木の茂った急斜面を這い上がる。津軽海峡を小船で横断する。平泉の発掘現場をヘリコプターから身を乗り出して。など筆舌には尽くせないほどであった。

このようなチャレンジの精神は、地域住民である視聴者によって敏感に受け止められて、数々の積極的な反応を生み出すことになった。スクーリングの機会にも、地域の城館にかかわる具体的な質問が寄せられた。歩いて確かめた手書きの図面などを持ち込む人もあった。質問のなかには、最先端の問題にかかわるハイレベルのものがあつ、それによって、講師の間で学界を想わせる熱心な論議が展開され、参加者の興味をより一層に高める役割をはたした。

スクーリングにさいしては、会場近くに位置する城館（仙台城）と板碑の実際にふれながら、質疑・応答を行うという臨地のスタイルが試みられた。参加者の目の輝きには、予想を超えるものがあつ、質問もとぎれることなく、時間の経過を忘れさせられるほどであった。

講座の終了後、それぞれの地域の城館に足を運んだグループの報告が入ってきている。講師の同行をもとめる誘いの手紙が舞い込んで来ている。うれしい悲鳴である。

（ラジオ科目）日本古典文芸にみる女性像

主任講師：文学部教授 菊田 茂男

男女雇用均等法が施行されて満5年、日本女性の職場進出や社会的地位の向上には目覚ましいものがある。女性を取り巻く社会的環境が、心理的にも物理的にも、急速に改善・整備されつつあることは言うまでもない。このような動向が、実は、鎖につながれた古典時代の女たちの悲劇の歴史によってあがなわれたものであることを忘れてはなるまい。

今回のラジオ講座のテーマ「日本古典文芸にみる女性像」は、そうした問題意識の設定に立って、日本古典文芸に描かれた女性像の内奥深くに分け入り、暗い絶望の淵からの現代への問いかけに耳を傾けることを目的とするものであつた。それは、とりもなおさず、最近のフェミニズム文芸批評や女性学の研究成果をも十分に取り入れたうえでの、日本古典文芸を読むための新たな視点と方法を提供するものでもあつたはずである。

全13回の放送内容は、自由に躍動する女の季節（古代）、しがらみに生きなづむ待つ女の悲哀（中古）、運命の激流に立つ女の悲劇（中世）、鎖につながれた女の宿命（近世）などを、それぞれ描く古代・中古・中世・近世の各時代の文芸にみる女性像の織り成す光と影の幻像とその展開の諸相を辿り、人生に生きなづむ女たちの真実のすがたを照射することによって、おのずと古典文芸の特質に迫る道を開示すべく配慮したものである。その際、日本の婚姻史・住居史など、女性像の成立的基盤をも明らかにしつつ、8名の講師の専攻分野に対応して時代・作品を配し、最新の研究成果を織り込んだ古典文芸入門の役割をも同時に果たすべく企画したつもりである。しかしながら諸般の事情により、主任講師が、テキストの内容、例えば、相互の趣旨の一貫性・関連性や用字・用語など表記の統一についての調整を責任をもって行うことができなかったのは心残りであり、今後の反省としたい。一方、今回は特に、放送の途中に、コラム「勿忘草」を挿入し、古典文芸の基礎知識に関する事項を600字程度で解説し、コーヒー・ブレイクを有効に活用するよう試みた。これは、放送局側の創意と提案によるものであり、受講生の反応も好意的であった。

スクーリングは、受講生からの適切な質疑や鋭い問題提起によって、回を重ねるごとに活発化し、ときには、文芸の問題を越えて、人生論・宗教論・家族論・日本人論にまで話題が及び、予定の2時間を大きく超過することがしばしばだった。知識や情報を一方的に伝達し、それを理解させるにとどまらず、対象やテーマにそくした論理的・感性的な思考力と情感を誘い出す、という本来の意図のひとつは、一応達成されたものと考えて差し支えあるまい。

最後に、不慣れな講師たちを、忍耐強く見守って下さり、たえず適切な御助言と御指導を賜わった大学教育開放センターの関係教官、東北放送ラジオ局制作部のスタッフの方々、それに、あたたかいまなざしと熱意を送って下さった受講生・聴取者の皆様方に、心から感謝の意を表するものである。

Ⅱ. 制 作 報 告 (テレビ科目)

(1) 制作責任者報告

東北放送テレビ局部長（総合プロデューサー） 近田 達夫

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

（ラジオ・テレビ共通）

「大学における研究・教育の成果を、放送を通じて地域社会に開放する」という東北大学開放講座の基本精神は、本講座のスタート以来東北大学と、東北放送との共通認識となっている。その分野における研究・教育の最も進んだ成果を高質のままに、いかに分かりやすく視聴学習者に伝えるかがこの番組の大きな目的といえよう。いかに学問分野の最先端をいき、高度の研究成果であっても、それが視聴学習者に理解されなくては、目的が達せられたとは言えないであろう。それが制作側として最も腐心するところである。制作側としては、年度当初の会議では制作側の意図を担当講師に理解してもらい、また各回毎のテーマ、番組はそれ自体、研究成果のオリジナルテキストであり、フルテキストであるべきだと考えている。そのため、制作の手法、素材などについて担当講師と数回にわたって意見を交換し、さらに取材の際には同行をお願いして的確な講義、番組表現に心掛けている。

また、視聴者＝学習者の反応も制作側としては大いに気に掛かるところである。ラジオ、テレビを通して学習するのであるから、番組それ自体が理解できる講義でなければならないと考える。スクーリングは、それを知る大変よい機会である。制作側では、プロデューサー、ディレクターが、スクーリングに出席し講義を聴くとともに、視聴者＝受講生の反応を確かめることにしている。「子曰、学而不思則罔、思而不学則殆」をひくまでもなく、制作側の経験を理論的に裏付けるまたとない場となっている。制作側としては、これまでに得たものに、年々新しい業績を積み重ね「放送による大学開放講座」の歴史的資産を大きくしていきたいと考えている。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

平成3年度のテレビ講座のテーマは、「中世みちのくの城館」であった。

本講座では、中世、平安・鎌倉から戦国期の城郭・居館の生成・発展、地域分布とその特徴、人々の生活や政治・文化とのかかわりなどを解き明かそうとするもので、あわせて破壊の危機に直面している歴史的環境の保存の問題についても考えていこうというものである。

各回毎のテーマとしては、古代から中世へ、中世から近世への城館の生成・発展という時代的な流れを追うとともに、蝦夷地＝北海道、東北、畿内、それにヨーロッパの中世の城館の比較など地域的な広がりを考えて構成した。また、中世の城館が身近なところにありながら石垣や天守閣がないので意外に知られていないため、極力現地の遺構を映像化した。また、発掘物についてはなるべく実物を多く紹介することによって講義に実証性をもたせるように務めた。

このため、東北地方の城館のほか、津軽地方と蝦夷地の城館の関係を探る目的で、船で津軽

海峡を渡りアイヌの城館「チャシ」の跡を映像に収め、馬産地との関連を知るため南部地方を取材した。さらに中世城郭史上差異が見られる中部・近畿の城館を撮影するため京都府、福井県、滋賀県などへも足を延ばし、担当講師の指導のもと貴重な映像教材を得ることができた。

また、中世の城館は目に見えるはっきりした建造物として残されていないため発掘調査の結果をもとに描かれた縄張り図や、文化財として保存されている絵図面、絵画などを教材として多用した。図面のフリップ化にあたっては、学問的精密さに留意したが一過性をもつテレビ画面とのバランスには苦心したところである。

第一回スクーリングの際には、主任講師が受講生を引率して仙台城に足を運び、中世の遺構を実地に解説し、テレビによる学習の効果を高めていただいたことに制作者として感謝の意を表したい。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

本年度テレビ講座は、歴史学の分野がテーマであったことから受講生、視聴者の関心は例年に増して高かったと思う。また、身近にその遺構がある中世の城郭、居館を取り上げたことから、郷土史の愛好家を取り込むことにもなった。さらに近年光が当てられ、注目を集めている中世史がテーマであったことも人々の興味をそそったことであろう。このことは、受講生の応募状況、スクーリングへの出席状況、視聴率の高さにも現れている。

番組の構成としては、中世の城館は近世の城のように容易に目にすることができないため、専門の研究者でなければ見分けのつかない遺構や、発掘された遺構をできるだけ多く映像教材化し、それをもとに講師が講義をし、中世史学の最先端の研究成果を発表してもらった。地域的にも蝦夷地＝北海道から畿内までの中世城郭を比較検討したことで受講生の学習への興味を高めたと思う。また、発掘された当時の人々の生活を物語る遺物を実物で示したことや、今も屋敷内に残る板碑や濠など身近な中世の歴史的遺産を取り上げたことからさらに親しみが増し、講座の目的のひとつである破壊の危機に直面している歴史的環境の保存に対する関心も高まったものと思う。

プロデューサー、ディレクターは、受講生の番組に対する反応をつかむためスクーリングに出席し、受講生と講師との質疑応答に注意を払っているが、熱心に番組を視聴してくれていることが感じられ、講師への質問も的を得たものであり、学習に対する関心の高さがうかがえた。

東北大学開放講座は、平成2年度から、30分番組、18回の放送となり、今年度はこの形式による2年目となる。10月開始、年内終了という制約から、放送時間は、土曜日午前7時から主とし、一部金曜日の午前11時から編成せざるを得なかった。異曜日、異時間編成に対しては、受講生、視聴者の側からすれば生活時間、視聴習慣などから戸惑いがあったと思われる。

視聴率をみると、18回平均2.7%と前年を0.5ポイント上回った。このことから、異曜日、異時間という編成上の制約を越えて受講生、視聴者の興味、関心は高かったといえよう。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

東北大学開放講座が、30分番組、18回の制作・放送の形式になって本年度は2年目である。前年度の経験を生かして、講師陣に、《一回の講義内容を絞り込むこと》《放送による講義を視

聴しながら受講生がそのポイントを反芻・確認できる間をとること》などを要望した。しかし、講師陣にとっては30分という時間内に膨大な研究結果を発表することは、つらい作業であったようだ。研究成果を質を落とさず伝えようとすれば、結果として質・量ともに相当多くのものを詰め込むことになってしまう。このことは最後まで、講師陣だけでなく、制作者としても悩んだことであった。テレビというメディアにおける映像と音声の関係は重要かつ微妙である。講座番組においては、映像は《感性的》に使われるよりも、《論理的・説明的》に使用されることが多い。このため《論理的・説明的》映像は、ある程度時間をとって示す必要がある。適確な時間長があって、受講生はその事項を確認し、自ら反芻し、理解に至るものと思うのである。受講者の集中力、理解の度合い、番組編成などさまざまな問題での議論が続けられ、30分番組、45分番組の試行が行われていると思うが、この点についての議論をさらに深める必要があると改めて感じた次第である。

本年度のテーマは中世城郭史であったが、中世城郭の当時の姿は殆ど現存せず、発掘された遺構や遺物によってのみうかがい知ることができる。近世城郭のように建造物などが残っているわけではないので、受講生としてはそのイメージをつかむのに苦労したのではないかと思う。制作者としては、受講生のイメージ、理解を助けるため発掘現場や出土品を現地取材、実物の映像で示したほか、中世城郭の復元図・想像図を素材として使用した。このことによって受講生の理解を高めることができたと思うが、将来は、経費、制作に要する時間、技術などの条件が整えば、CGの使用による立体映像での講義の導入が課題となろう。

一方、スクーリングで気がついたことであるが、意外に基本用語、technical terms についての質問が多いことであった。番組では画面に字解を挿入して、受講生の理解を助けるようにしているが、テキストによる術語解説、各回の放送、またはまとめの回での基本用語・術語解説が必要かとも思われる。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：東北放送テレビ局制作部次長 天野 弘三

企画決定まで

「中世みちのくの城館」シリーズは、主任講師・入間田教授の取材依頼がそもそもの切っ掛けである。「奥州藤原氏の政庁『柳の御所』遺跡が、堤防と国道バイパス建設のために破壊されてしまう。いま、そのための発掘調査が行なわれている。これを学術資料として取材してほしい。」と、いう要請があり、現地へ向ったのが、'88年12月のことであった。そこで目にした光景は、造成地そのもので、巨大な堀、橋脚跡、多くの柱穴や緯度の跡が台地にあった。そこから大量のカワラケ（土器）、白磁、陶器などが出土していた。翌年も取材を続けた。その頃から、単に記録に留まらず、開発の進展と埋蔵文化財の破壊という現実を広くアピールしたいと思い、番組化の方法を探った。

これが、「中世みちのくの城館」の背景である。

制作過程で

平安末、鎌倉時代の武士の城は、平地の館であった。百姓の環濠集落も同様であるが、それらは、石垣などはなく、ただ、堀をめぐらし、内側に土塁を築いた程度のものに過ぎない。中世の遺構として、溝のような堀や土塁が残っていても、寺院などと異なり中世の建造物が現存している訳もなく、現状は、ただの農家にすぎない。

南北朝時代に城は高い山にのぼり、山を削平して曲輪をつくり、曲輪を守るための空堀、堀切を設け、切岸を削り戦闘本位の山城が出現するが、それとて土でできた城である。

室町、戦国時代になり、国人領主の領地支配が固まると、鎖国経営中心の平城、平山城あるいは、山城と麓の根小屋のセットが主流になるが、これも近世の城のように、巨大な堀を巡らし、石垣が積まれ、鉄砲狭間や塗壁の櫓、天守閣を築き、城下町をもつ城とは全く様相を異にする。山城の主要な防御施設は空堀、堀切、土塁である。

しかも山城は、一国一城令によって、ほとんど破却の道を辿っている。

文化遺産として、保存・整備されている守護、大名クラスの一部の城を除いて、中世の城は、永年の風雨にさらされ、今日では堀は埋まり、土塁は低くなり、曲輪は畑に姿を変え、自然に人工的に、ほとんど原形を留めず、ただの山林、雑木林としか見えないものもある。それらの施設を、築城法を明らかにするために、縄張り図にしたがって、空堀は空堀らしく、尾根筋を断ち切る堀切は堀切らしく、映像に切り撮り、その機能を説明させるのは困難な作業であった。

中世史ブームとはいっても、華麗さとは正反対の地味な映像を、毎回のように見せられては、歴史好きの視聴者でも飽きさせるのではないかと、という危惧をもったが、シリーズのグランド・デザインが変化に富んでいて、それは杞憂に過ぎなかった。

放送を終えて

「工事をするために、発掘調査する」ということは、調査は工事の露払いに他ならない、おかしな図式である。「経済大国」などと浮かれている国が、文化財行政をどんなに軽視しているか、平泉の一事を見るだけでも明白である。貴重な文化遺産の保存に有効な対策が速やかに講じられることを切望して止まない。

制 作 報 告（ラジオ科目）

（1）制作責任者報告

東北放送テレビ局部長（総合プロデューサー） 近田 達夫

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

（ラジオ・テレビ共通）

「大学における研究・教育の成果を、放送を通じて地域社会に開放する」という東北大学開放講座の基本精神は、本講座のスタート以来東北大学と、東北放送との共通認識となっている。その分野における研究・教育の最も進んだ成果を高質のままに、いかに分かりやすく視聴学習

者に伝えるかがこの番組の大きな目的といえよう。いかに学問分野の最先端をいき、高度の研究成果であっても、それが視聴学習者に理解されなくては、目的が達せられたとは言えないであろう。それが制作側として最も腐心するところである。制作側としては、番組はそれ自体、研究成果のオリジナルテキストであり、フルテキストであるべきだと考えている。そのため、年度当初の会議では制作側の意図を担当講師に理解してもらい、また各回毎のテーマ、制作の手法、素材などについて担当講師と数回にわたって意見を交換し、さらに取材の際には同行をお願いして的確な講義、番組表現に心掛けている。

また、視聴者＝学習者の反応も制作側としては大いに気に掛かるところである。ラジオ、テレビを通して学習するのであるから、番組それ自体が理解できる講義でなければならないと考える。スクーリングは、それを知る大変よい機会である。制作側では、プロデューサー、ディレクターが、スクーリングに出席し講義を聴くとともに、視聴者＝受講生の反応を確かめることにしている。「子曰、学而不思則罔、思而不学則殆」をひくまでもなく、制作側の経験を理論的に裏付けるまたとない場となっている。制作側としては、これまでに得たものに、年々新しい業績を積み重ね「放送による大学開放講座」の歴史的資産を大きくしていきたいと考えている。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

平成3年度ラジオ講座のテーマは、「日本古典文芸にみる女性像」であった。本年度講座のねらいは、日本古典文芸の作品を通して、そのなかにみられる女性たちの真の姿を浮き彫りにし、女の生き方について考える、というものである。取り上げた作品は、『古事記』『万葉集』『蜻蛉日記』『枕草子』『竹取物語』『源氏物語』『平家物語』『建礼門院右京大夫集』『世阿弥・謡曲』『好色五人女』など文芸学上の主要作品を網羅している。これに総論・概論として「女性像の系譜」と「王朝の婚姻史」を加えた。このテーマは、主任講師が長く温めたもので、東北大学の国文学研究の伝統である文芸学の立場から、日本古典文芸に現れた女性像の系譜を解き明かすとともに、現代のフェミニズムの問題にもアプローチしようとするものであった。

制作者としては、論叢として表されることの多い文芸学を、その特徴、薫りを失うことなくいかに音声のメディアで伝えるかに心を遣った。具体的な制作手法としては、講師のキャラクター、語り口を生かし、文芸学の特徴を損ねることなく伝えるべくオーソドックスな講義の方式を採った。

取り上げる文芸作品はそれぞれ日本人に親しまれてきたものであるが、“美学の基礎の上に立つ様式原理をもって日本文芸の美的価値をとらえる”日本文芸の方法は、受講生にとって難解さを感じさせるのではないかと思えた。用語にしても、哲学、美学などとの関連もあり、音声のみのメディアであるラジオとして、学問・研究の質を落とさず、いかに平明に受講生に伝えるかを眼目とした。このことから、放送原稿の構成、語彙の解釈・言い換えなど講師と意見を交わし、出来る限りの平易な講義をお願いした。講義についてはオーソドックスな方法を採用一方で、講義の中間に国文学コラムといった時間を設けて、受講生の緊張をほぐした。『コラム・わすれな草』と名付けたこの時間は一回2分程度。文芸学、国文学の基礎知識、作品の時代背景、時代時代の女性の生き方、古典閑話休題といった担当講師の軽妙な文章を、音楽に

のせてアナウンサーが読み、受講生から好評であった。単なるコーヒブレイク的なものでなく、受講生の緊張を和らげると同時に、講義への興味を増す目的で発想したのであるが、効果は上げられたと思う。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

これまでの実績からみると、日本の古典文学をテーマにした年度は、受講生が多いという傾向にあるが、その例にもれず本年度も多くの熱心な受講生が集まった。

本年度は、古典を取り上げたとはいえ、“源氏物語、平家物語を読む”といった所謂《教養講座》的なものではなかったので、受講生の応募状況、聴取者の関心・反応が注目されたが、受講生の応募は前年度を上回り、聴取率も前年度をやや上回る結果となった。

制作にあたって特に注意したことは、文芸学特有の表現、語法をその特長を損なうことなく、いかに平易に講義していただくかということであった。古語、固有名詞、専門用語、同音異字などについては特に意を用い、字解や言い換え、含意の説明・解釈を行ってもらった。このことによって、講義がやや冗漫になるのではないかという懸念もあったが、受講生の理解は助けられたと思う。ラジオは、音の世界、音だけの世界であり、テキストを持っている受講生は別として、聴取者は耳からしか情報を得ることができないのであるから、講義の理解ということを考えれば必要な手法であったと思っている。

今回試みた『コラム・わすれな草』は、受講生の緊張をほぐし、講義への興味を高めたものと評価できている。講師にとっては、講義のほかにコラムの執筆をお願いし、二重の苦労をされたと思うが、作品に対する講師の思い入れ、時代背景への豊かな洞察力、軽妙洒脱な筆致など、オーソドックスな講義だけでは知り得ない講師のキャラクターを引き出し、講義、番組を盛り上げる効果を十分に果たしたと密かに自負している。受講生からも、正統派の講義とともに、この『コラム・わすれな草』は楽しみであったという感想が寄せられている。

スクーリングにおける講師陣と受講生との質疑応答は、非常に活発であった。作品の解釈、講義に対する疑問点の質問が出されたことは勿論であるが、そこから発展して、講師対受講生、さらには男性講師対女性講師で、女性論が闘わされるといった場面もあり、熱気溢れるスクーリングであった。古典というその時代の生み出したものをテーマにしながら、それが up to date な議論に発展して行ったことは、主任講師の企画意図にも結びついたものと、制作者としても喜んでいる。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

ラジオは、音声単独のメディアである。それだけに、見方によっては難解な学問ともいえる文芸学の講義内容を過不足なく受講生に伝えることは、難しい仕事であったし、同時にやり甲斐のある作業であった。音声だけのメディアであることを講師にもより理解してもらい、同音異義語の言い換え、重層性のある言葉の説明・解説などには、充分心を遣っていただいた。と同時に、制作者としては、講師のキャラクター、語り口、さらには独特の言い回し、癖までも含めてその人間を出していきたいと考えている。そうであってこそ、活字になった論文を読むにとどまらず、講師の聲に接することになり、ラジオを使った講義の意義が見いだされるこ

と思う。

ラジオは、伝達の方法として音声のみという制約のあるメディアだ、と述べたが、そのゆえに無限のイメージを広げることのできるメディアだということができる。

ラジオ講座の制作者としては、そのテーマに相応しい手法を使って、講座番組の制作・放送にあたりたいと思っている。制作者としては、大学における研究の動向を知るように努め、時代の要請を的確に把握し、これまでも増して企画の提案をしていきたいと考えている。また、担当講師との議論を深め、高度の研究成果を平易に伝えることに努力していきたい。

さらに、ラジオによる講義に対する受講生の意見・反応を把握し、来年度以降の番組制作に生かしていきたい。

これまで音声のみによる講義伝達ということから、取り上げることがなかった自然科学系の講座をラジオでも実施してみたいと考えており、その手法など番組制作について今後の研究課題としたい。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：東北放送ラジオ局制作部 杉崎 祥子

本講座「日本古典文芸にみる女性像」は、その目的、13回の構成内容とも“今”にふさわしいものであったと思う。女性の社会進出がめざましい現代において、生き方の多様化は、時として人生に羅針盤を要することにもなる。日本古典文芸の世界を彩る女性たちの、しがらみのなかを生き抜く光と影を深く見つめることで、“今”を生きるものの意味を心に刻むことができると信じた。単なる古典鑑賞ではない。『古事記』『万葉集』『蜻蛉日記』『枕草子』『竹取物語』『源氏物語』『平家物語』『建礼門院右京大夫集』そして、謡曲（世阿弥）『好色五人女』、その女性たち（作者・作中人物）の喜怒哀楽とその叫びを現代に生きる女性の姿に照射し、光と影の意味を探ったのである。

また、女性たちの生き様の光と影を、番組構成の中に形をかえてとりいれてみようと考えた。ラジオという音だけの世界、しかも、45分間という緊張の重みを、陰影をつけることによって解き放つことができないだろうか…。私たちは、意識的な“コーヒー・ブレイク”挿入を講師を交えた全体会議で提案した。最初、この提案は戸惑いの沈黙を生んだ。放送が流れて初めて、番組に紡がれた光と影のもつ深みへの理解が生まれた。その“コーヒー・ブレイク”とは、名付けて「コラム・わすれな草」。コラム執筆は、その回の担当講師。アナウンサーが朗読した。番組のほぼ中頃に、その回のテーマのサイド・ストーリー、前半部と後半部の橋渡しの事柄、古典を理解するうえで縁になるもの、古典全般へ興味と親しみを広げられるような事柄などを、音楽にのせて挿入した。「成田離婚と平安時代のスピード離婚」「夫から雨蛙と呼ばれた道綱の母」「『万葉集』の女と山内一豊の妻の内助の功」「『源氏物語』と『史記』呂后本紀」…2分から3分の“影の存在”は、光としての本篇に一層の輝きを与える効果を生んだ。

コラムの内容には、研究者としての顔とは又違った面が描かれるため、8人の講師それぞれの個性が味わえる幾重もの楽しみも加わった。“コーヒー・ブレイク”は、“コーヒー・タイム”

とは少し趣を異にするものだと考える。「break」には、休憩する・中断するなどの意味の他に、（つばみ）がほころびる・（枝が）新芽を吹く…などの意味がある。その二通りの意味あい番組の中で程よく発酵しあった時、リスナーの求める“コーヒー・ブレイク”になり得るのではないだろうか。

放送による「地域にひらかれた大学教育」は、時として、研究成果の発表に比重がかかることがあるがその成果を受け止めたリスナーの心に後々まで続く“潤いある流れ”を導きだせるか否かが講座成功の大きな鍵になっていると思う。初めて試みた意識的な“コーヒー・ブレイク”の挿入がその鍵になり得たか… 一番、心にかかるところである。

平成3年

東北大学開放講座

ラジオ聴取率

ラジオ講座

「日本古典文芸に見る女性像」(10/13~12/22)

1991.1.13

調査部

テレビ聴取率

テレビ講座

「中世みちのくの城館」(10/5~12/21)

I ラジオ聴取率 (調査日平成3年12月1日)

性・年齢・職業別 番組名・放送時刻		個人 聴取率 (%)	エ聴 取率 (%)	男 性	女 性	性(歳)						性(歳)						性		全体										
						男			女			男			女			男	女											
						12	18	25	35	45	12	18	25	35	45	学生	給生				商自 工由 自業 営者	学生	有職 者	家無 庭婦 人職	ドライバ ー					
名曲の小箱 東北大学開放講座	19:55~20:00	0.8	24,000	0.5	1.0	*	*	*	*	2.1	*	3.1	*	*	1.9	*	0.9	*	1.0	*	1.0	*	1.0	*	1.0	*	1.0	*	1.0	*
	20:00~20:30	0.3	9,000	*	0.5	*	*	*	*	*	*	3.1	*	*	*	*	*	*	1.0	*	0.5	*	*	*	0.5	*	*	*	*	
	20:30~20:45	0.3	9,000	*	0.5	*	*	*	*	*	*	3.1	*	*	*	*	*	*	1.0	*	0.5	*	*	*	0.5	*	*	*	*	
メモリーヒットボックス	20:45~21:00	0.8	24,000	0.5	1.0	*	*	*	2.4	*	3.1	2.1	*	*	*	0.9	*	2.1	*	1.5	1.0	0.5	1.0	0.5	1.0	0.5	1.0	0.5	0.5	

II テレビ・世帯視聴率 (平成3.10.5~平成3.12.21)

番組名・放送時刻		月 日		10		12		19		26		11		1		2		8		9		15		16		22		23		29		30		12		7		14		21		平均	エリ ア内平均 視聴世帯数
		5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土	5	土		
ニ ュ ー ス コ ー ル		7:5	7:5	5:9	6:2	3:1	8:1	2:7	5:4	2:8	3:4	1:5	3:3	3:7	6:9	2:2	4:0	6:6	5:7	4:8	58,560																						
東 北 大 学 開 放 講 座		2:8	3:3	3:4	4:0	1:2	3:5	1:0	3:4	1:8	2:1	1:1	1:8	1:5	3:5	1:9	2:2	3:9	6:3	2:7	32,940																						
ビ ジ ネ ス ズ ー ム ア ッ プ		5:8	3:5	4:4	5:0	0:9	4:5	2:1	6:1	3:5	4:7	3:7	5:9	2:2	5:9	3:9	6:3	6:3	7:2	4:6	56,120																						

Ⅲ. 講 座 の 概 要

◎ 科目の概要

科 目 名	中心的なテーマ	科 目 の ね ら い	内 容 ・ 方 法	放送曜日・ 時間・期間
中世みちの くの城館 (テレビ)	中世の城館を 通して地域の歴 史的環境を考え る。	今日、地域開発の波が押し寄せるなかで、地域の自然環境とともに、歴史的環境も破壊の危機に直面している。本講座では、具体的な「場」であるバラエティに富んだ中世の城館を通して、古文書だけではわからない地域の歴史的環境の形成を明らかにし、あわせてその保存の問題についても考えていく。	I. 講座は5部からなる。 (1) 総論 1回 (2) 中世城館の発達 8回 (3) 歴史的環境の形成 7回 (4) 西洋との比較 1回 (5) 歴史的環境の保護 1回 (1) では、総論として中世の城館と地域の歴史的環境の関連について論じる。 (2) では、中世城館の変遷を多角的な視点から論ずる。 (3) では、城館とそれを取り巻く町や村によって形成される地域の歴史的環境について論ずる。 (4) では、中世ヨーロッパの都市と城塞について論じ、比較の視点を加える。 (5) では、青葉城二の丸発掘の成果を紹介し、あわせて歴史的環境の保護の問題にも言及し、全体のまとめとする。 II. 全体を通して、中世城館のもつ魅力を紹介し、最後に、歴史的環境の保護という今日の問題にふれ、講座のまとめをはかる。	毎週土曜日 午前 7:00 / 7:30 平成3年 10月5日 / 12月21日 ただし 第5回、7回、 9回、11回、 13回、15回 の各回は 11月1日、 8日、15日、 22日、29日、 12月6日の 各金曜日 午前11:00 / 11:30 に放送 18回
日本古典文 芸にみる女 性像 (ラジオ)	日本古典文芸 のなかにみられ る女性像をさぐ る。	日本古典文芸の作品を通して、そのなかにみられる女性たちの真の姿を浮き彫りにし、女の生き方について考える。	I. 第1回では、総論として古典文芸作品における女性像について論じ、導入をはかる。 第2回から最終回では、	毎週日曜日 午前 8:00 / 8:45

			<p>古典文芸の諸作品を取り上げ、それぞれにみられる女性像を多角的な視野から論じる。</p> <p>Ⅱ．主任講師が全体を統括し、講義内容に一貫性をもつようにする。</p>	<p>平成3年 10月13日 ∫ 12月22日</p> <p>ただし 第10回は 12月14日 第12回は 12月21日 の各土曜日 午後 8:00 ∫ 午前 8:45 に放送 13回</p>
--	--	--	---	--

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 中世みちのくの城館

回	放送日	中 心 テ ー マ	内 容	担 当 講 師
1	10月 5日 (土)	中世城館の魅力	<p>平安～戦国の城館には、石垣がない。天守閣がない。しかし、数が多い。どんな町・村にも、数か所はある。造りがバラエティーに富んでいる。さまざまな工夫や仕掛けが観察できる。自然堤防の微高地、台地の縁辺、急峻の山頂など、立地条件もいろいろだ。実におもしろい。地域の歴史的環境を考える上で、最良の情報源である。</p>	入間田 宣 夫 大 石 直 正 村 田 修 三
2	10月 12日 (土)	平泉柳の御所の発掘	<p>柳の御所は藤原氏四代の居館跡である。寝殿造りを想わせる建物・園池、そして長大な堀跡などが発掘されている。いくつかのブロックに仕切られた一族・郎党の居住空間のありかたには、中世城館の原型があらわされていた。</p>	入間田 宣 夫
3	10月 19日 (土)	平地の城と村	<p>中新田や名取の水田地帯のなかには、屋敷林を廻らした旧家が残されている。その西北の一角には板碑の屋敷神が祭られている。平地の城の原型には、そ</p>	入間田 宣 夫

			の旧家のたたずまいに近いものがみられた。それが次第に拡張されて行くのである。	
4	10月 26日 (土)	南北朝内乱と山城	南北朝内乱期は、峻険な山上に城郭をかまえる山城が発達した時期である。東北地方では、福島県伊達郡の霊山城や同じく須賀川市の宇津峰城などが代表的な山城である。何故この時期に山城が発達するのだろうか。	大 石 直 正
5	11月 1日 (金)	大名の城、一揆の城	室町・戦国時代の武士＝領主たちの活動の拠点であった城のあり方を考える。伊達・芦名のような大名と、一揆を結び連合して行動した中小領主たちと、城の性格や領主としての性質を対比して考えてみたい。	羽 下 徳 彦
6	11月 2日 (土)	留守領内の城と町	留守氏は戦国時代に宮城郡の東半分を領有していた国人領主、その居城は仙台市岩切の岩切城(高森城ともいう)だった。この時期内には、城とともに町が発達する。城と町はどのように関係しあっていたのだろうか。	大 石 直 正
7	11月 8日 (金)	松山領の開発と城	中世の水田開発は、山裾の小川のあたりから始められた。村や道、そして千国・長尾などの城館群ができたのも、山沿いのその近くであった。鳴瀬川が乱流する広大な谷地(低湿地)には居住の条件がなかったのである。	入間田 宣 夫
8	11月 9日 (土)	屋敷の中の生活 ー多賀城市新田遺跡ー	新田の屋敷跡からは多くのやきものや木製品が掘り出されている。大半を占めるのは日常の生活用具であるが高級な調度品も少なくない。当時の武士の生活はどのようなものであったのか、これらのモノを通して実態に迫ってみたい。	千 葉 孝 弥
9	11月 15日 (金)	古代の城柵	中世の城館に先だって、東北地方には7世紀～10世紀に律令国家の辺境支配のために、多くの城柵が設けられた。一般の地方官衛と異なる城柵の施設の構造の特質とその支配の実態について語る。	今 泉 隆 雄

10	11月 16日 (土)	中世山城の構造	山城の構造（縄張り）は、地域・時代・機能・階層（築城主体）等によって異なる。多様な山城が歴史的背景とのかかわりでどのように興廃したかを、日本列島各地の事例を紹介しながら考える。	村 田 修 三
11	11月 22日 (金)	中世山城の発掘	昭和40年代後半から実施されるようになった本格的な発掘調査によって、山城の実態がしだいに明らかになってきた。未だ体系的に検討できる段階には至っていないが、その現状について紹介する。	小井川 和 夫
12	11月 23日 (土)	「北の海の世界」の城と館	日本列島の北方世界、津軽・下北・道南の海岸に沿って城館が分布する。それは「北の海の世界」の交易の新しい手＝海民的領主たちの活動の拠点であり、城と湊と町が密接に結び付いた独特の世界であった。	斉 藤 利 男
13	11月 29日 (金)	北奥の城館	中世日本の東の境界といわれた北奥には、辺境ゆえに多様な城館が存在する。「御所」波岡氏の波岡城、「屋形」南部氏・安藤氏の城、そして村々に分布する数多くの館。これらの城館のあり方から北奥の中世を探る。	斉 藤 利 男
14	11月 30日 (土)	最上氏と長谷堂城合戦	長谷堂城は、1600年、上杉氏の大軍をむかえうった最上領内でもっとも堅固な城であった。同城の築城プランより、主郭を中心に求心的構造をもつ城郭のあり方とその意義について考えてみる。	誉 田 慶 信
15	12月 6日 (金)	戦国大名伊達氏の城館	福島・山形・宮城3県にまたがる戦国大名伊達氏の領国のうち、おもに福島県北の伊達氏関係の史跡をたどり、鎌倉初期伊達郡入部以後の勢力発展にもふれながら、桑折西山城以下、戦国大名伊達氏の城館を紹介する。	小 林 清 治
16	12月 7日 (土)	ヨーロッパの都市と城塞	古代ゲルマンの避難城塞や古代ローマの城砦に由来する中世の城塞は、都市の発達とともにどのように変容し、	渡 部 治 雄

			中世末期になぜ城館と要塞に分離するのか。現存する「中世都市」を例として考えてみたい。	
17	12月 14日 (土)	青葉城と城下町	仙名城築城と仙台城下町建設を一体的なものとする立場から、仙台地区に築城したことの政治史的意義および建設された城下町の政治・経済・文化的機能について考えてみたい。	渡 辺 信 夫
18	12月 21日 (土)	青葉城二の丸を掘る	現在の東北大学川内キャンパスの地下には青葉城二の丸の遺跡が眠っている。近年の発掘によって明らかになりつつあるその姿を紹介し、併せて歴史時代の考古学、歴史的環境の保護の問題も考える。	山 田 しょう

(ラジオ科目) 日本古典文芸にみる女性像

回	放送日	中 心 テ ー マ	内 容	担 当 講 師
1	10月 13日 (日)	日本古典文芸のなかの女性たち －女性像の系譜－	古代から中古・中世・近世へと流動する日本古典文芸の世界は、多様な女性たちによって彩られる。その光と影の織り成す女性像の原像と展開の諸相を辿り、しがらみのなかを生き抜く女性たちの真実のすがたを照射する。	菊 田 茂 男
2	10月 20日 (日)	日本古典文芸のなかの結婚 －王朝の婚姻史－	王朝の婚姻は、生母所有の第宅に住む女性のもとへ夫となる男性が通うという通い婚を常態とする。夫婦は別産、別姓のままで、そこに生まれた子女は専ら妻が養育の任を負うが、子女の姓氏は必ず夫のそれに帰一する。	新 田 孝 子
3	10月 27日 (日)	「古事記」のなかの女性像 －愛と死の構図－	「古事記」には、垂仁記の沙本毘売、仁徳記の女鳥王、允恭記の軽太郎女など、愛に殉じて死んでいく女たちの話がみられる。沙本毘売の話を中心に、そのような女性像がどのように形成されたのかということを考えてみたい。	仁 平 道 明

4	11月 3日 (日)	「万葉集」にみる女性像 －恋の歌と抒情のかたち－	「万葉集」において相聞に分類される歌の中に、恋人どうしの歌ではないものがある。そのような歌の表現をさぐり、表現の中の「女性像」をみることによって、万葉歌の恋の表現と抒情のかたちをたしかめてみたいと思う。	仁 平 道 明
5	11月 10日 (日)	家の女の人生遍歴 －道綱の母と「蜻蛉日記」－	平安時代の文芸の創造者である受領階級の女性のうち、道綱の母は典型的な「家の女」であった。「蜻蛉日記」はその夢想的、閉塞的な体験的世界を「回顧的展望」を以て造型した「身の上をのみする日記」である。	新 田 孝 子
6	11月 17日 (日)	宮仕え女房の栄光と挫折 －「枕草子」の美意識－	清少納言は、典型的な宮仕え女房としての体験と真情を、「枕草子」のなかに書き綴った。その世界を底流する理想と現実の落差に苦悶する彼女の栄光と挫折の軌跡を、「しかし」の美意識を補助線として解明する。	菊 田 茂 男
7	11月 24日 (日)	かぐや姫と結婚拒否 －「竹取物語」の構想－	一般に知られているかぐや姫ストーリーは、姫が竹取翁夫婦の子となり富と力を与え、切ない別れを経て天に帰るというものである。しかし、物語の筆は、姫が貴公子と帝の求婚をいかに退けるかに多く費されている。その意味は？	荒 暁 子
8	12月 1日 (日)	「源氏物語」のなかの女君 (その一) －光源氏をめぐる女性たち－	光源氏の生を貫く固有の論理を、自らの情念が女に向かって発動する、まさにそのこと自体が自己目的化している点に求め得るものと考え。そのような光源氏と関りつつ生きた女性たちのあり様を探る。	小 島 雪 子
9	12月 8日 (日)	「源氏物語」のなかの女君 (その二) －薫の愛した女性たち－	薫が心を寄せた宇治の三姉妹は、それぞれ自ら選びとった三様の人生行路を歩むことになる。そうした愛と死と宗教の三項関係の構図に生きなずむ大君・中君・浮舟の人生模様のなかから、王朝的女性像の特質を探り出す。	菊 田 茂 男
			「平家物語」は源平の争乱を素材とした作品である。したがって、「平家	

10	12月 14日 (土)	「平家物語」のなかの女性像 －激動に揺れる女の心－	物語」の世界には激動の時代を生きた さまざまな女性たちの姿がみられる。 激しく変転する女性の運命と生き方を 考える。	鈴木 則 郎
11	12月 15日 (日)	追想に生きる女 －「建礼門院右京大夫集」 の世界－	「建礼門院右京大夫集」は、平氏の 貴公子平資盛との恋におちた建礼門院 右京大夫の自伝的な日記とみられる作 品である。資盛との恋に生き、資盛と の恋の思い出のなかで老朽ちて行こ うとした右京大夫の生き方を考える。	鈴木 則 郎
12	12月 21日 (土)	謡曲のなかの女性像 －世阿弥の美の世界－	室町時代、足利義満の庇護下で世阿 弥は遊興的色彩の強い猿楽能を芸術の 域まで高めた。「花」への飽くなく追 求を通し絢爛たる美の世界を樹立した 彼が、謡曲のなかに造形した女性像と はどのようなものか、考察する。	原 田 香 織
13	12月 22日 (日)	西鶴の描いたヒロインたち －「好色五人女」の世界から－	西鶴にあって、事件や人物の表現手 法はしばしば他に類のない独自性を見 せるが、それらは実は作者の人間観そ のものを現している。「好色五人女」 の五人の女主人公のうち一、二の場合 を取り上げて彼の人間観を探る。	佐々木 昭 夫

◎ 受講生の応募等

テレビ講座 265名

ラジオ講座 226名

◎ スクーリング

(テレビ科目) 中世みちのくの城館

	実施場所	実 施 日 時	備 考
第1回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年9月28日 (土) 午後2時00分～4時00分	
第2回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年11月10日 (日) 午後1時30分～3時30分	
第3回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年12月1日 (日) 午後1時30分～3時30分	
第4回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年12月15日 (日) 午前10時00分～12時00分	

(ラジオ科目) 日本古典文芸にみる女性像

	実施場所	実 施 日 時	備 考
第1回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年9月28日 (土) 午後2時00分～4時00分	
第2回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年11月10日 (日) 午前10時30分～12時30分	
第3回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年12月1日 (日) 午前10時30分～12時30分	
第4回 スクーリング	東北大学 教育学部	平成3年12月15日 (日) 午前10時00分～12時00分	

◎ 再視聴

実施場所	実 施 期 間 ・ 日 時	備 考
東北大学 教育学部	10月12日(土) ～ 12月21日(土) 毎週土曜日午後1時～5時	仙台市博物館に、常時再視聴の協力を求める。